



## 「ジュニア・クラス」を通して 学んだまとめ

沖縄天久神の教会 中三

おなが らみ  
翁長 来道

2019 日本神の教会連盟の修養会に参加できたことを感謝します。今年も神様の導きの中、聖書の学びを受けることができたことをうれしく思います。また、このキッズ・プログラムのためにご奉仕してくださった先生方、捧げてくださった方々やお祈りをしてくださった方々に心から感謝します。そしてこのプログラムに携わって下さった一人一人に感謝します。そして第一に、この修養会を最初から最後まで守り導いて下さった神様に心から感謝いたします。

僕は今回、中学生クラスの「ジュニア・クラス」に参加させていただきました。銘形先生が聖書の教えを、森先生がヘブル語を、そしてラム先生と神田先生からも教えをいただきました。銘形先生からは「神の導き」と題して、新約聖書から神様の導きとはどういったものかということ学びました。ここではこの4人の先生方から学んだこと、そして自分が思ったことを簡潔に書きたいと思います。

### 1. 銘形秀則先生 「神の導き」

【新改訳 2017】 ピリピ人への手紙 2：12～16

12 こういうわけですから、愛する者たち、あなたがたがいつも従順であったように、私がともにいるときだけでなく、私がいなくて今はなおさら従順になり、恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。

13 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。

14 すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行いなさい。

15 それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった

邪悪な世代のただ中であって傷のない神の子どもとなり、

16 いのちのことはをしっかり握り、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は自分の努力したことが無駄ではなく、労苦したことも無駄でなかったことを、キリストの日に誇ることができます。

ピリピ人への手紙2：12～16には、「～し続けなさい」という現在進行形の命令形の言葉が二つ出てきます。一つは、12節の「努めなさい」。もう一つは、14節の「行いなさい」です。つまりこれらの言葉を言い換えると、「努め続けなさい」や「行い続けなさい」となるのです。つまり、私たちが生きている間ずっと「努め続け」て「行い続け」なくてはならないのです。では何を「努め続け」、何を「行い続け」なくてはならないのでしょうか。まず12節に「自分の救いを達成するよう努めなさい。」と書かれています。「救い」とは簡単に言えば、私たちがイエス・キリストを信じることによって私たちの罪が赦され、そして神の子どもとされるということです。では「救いを達成する」とはどういうことでしょうか。それは15節から16節の前半部分のところで、「あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代のただ中であって傷のない神の子どもとなり、いのちのことはをしっかり握り、彼らの間で世の光として輝くためです。」と書いてある通りです。「救いを達成する」とは神の子である私たちが世の中で世の光として輝くことです。では、救いを達成するよう「努める」にはどうすればよいのでしょうか。12節でパウロは「従順になり」なさいと言っています。誰に対して「従順」になるのか、それは13節にあります。「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」ここでいう神様は私たちのうちに働いておられる神様、そう聖霊様です。神様である聖霊様に従順するようここでは言っています。そしてこの聖霊様に信頼して、14節の「すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行いなさい。」と言っているのです。まとめると、私たちは救いを達成するように、世の中であって神の子どもとして輝くよう努め続けなければなりません。救いを達成するには、私たちは聖霊様に完全に従順にならないといけません。そして、この神様である聖霊様によって導かれる人生は、光り輝く人生です。

次に、神様の導きとはどういったものかということを使徒の働きの中から学びたいと思います。使徒の働きの中に記されている多くの事柄から、私たちは神様の導きというものを学ぶことができます。使徒の働き15：30～16：5で、パウロとバルナバが

激しい議論の末に別行動をとったということが書かれています。宣教旅行の過酷さゆえに途中であきらめて帰ってしまったマルコと呼ばれるヨハネをめぐって、二人は別行動をとることになったのです。マルコと呼ばれるヨハネを連れていくか否かの意見の食い違いから、二人は分かれてしまいました。バルナバは、一度挫折してしまったヨハネにもう一度チャンスを与えてあげようという指導者的な考え方を持っていました。一方パウロは、「宣教」というパウロに与えられた使命を達成するのにヨハネは妨げになるんじゃないか、まだまだ開拓伝道しなければならないところがたくさんあるんじゃないかというパイオニア的な考え方を持っていました。この考え方の違いから、二人は分かれることになってしまったのです。バルナバと分かれた後、パウロはシラス、そしてテモテや使徒の働きの著者でもあるルカを選び彼らとともに旅をつづけました。しかしながら、このバルナバとの「別れ」さえも神様の導きだったと考えることができます。ではここで少し考えてみてください。考え方の違う人間と一緒に仕事をするのは大変ですよ。必ずしも一方が正しくて一方が間違っているとは限りません。パウロとバルナバの場合も同様です。バルナバのように忍耐をもって弟子を育てることも大切ですし、パウロのように神様から与えられた自分の使命を全うするよう全力で励むことも大切です。しかし同時に、違う考え方を持つ人間同士で仕事をする、うまくいかないときもあります。このような場合、お互いが我慢しあってイライラするよりは距離を置くほうが良い場合もあります。一概には言えない問題なのですが、このパウロとバルナバの場合はそうでした。お互いが別行動をとることによって、それぞれが自分の最大限の力を出せるようになったと思います。事実、パウロは様々な困難に直面するのですが、困難のたびに帰ってしまう弟子がいたら大変ですよ。いちいち弟子たちの世話をしていたらパウロの宣教はどうなっていたんでしょうか。そう考えると、バルナバとの「別れ」は結果的に良い方向につながったといえます。人との「別れ」の中にも、神様の導きがあることがこのことからわかります。

最後に、苦難の中に働かれる神様の導きを学んでいきたいと思います。使徒の働き 16：6～15で、パウロはマケドニアという地方に行き、そこでティアティラ市の紫布の商人であるリディアという女性に会います。彼女は神を敬う人であって、神様ご自身が彼女の心を開いてパウロの語ることに心を留めるようにされたと書かれています。ここで重要なのは、パウロがマケドニアに着くまでにいろいろな地方を回っていた、迷っていたということです。6節に「アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、」とあり、7節にもまた「ビティニアに進もうとしたが、イエスの御霊がそ

れを許されなかった。」とあります。つまり、パウロが行く先々で「聖霊によって禁じられた」り、「イエスの御霊がそれを許されなかった」りしたのです。パウロは東のほうに宣教旅行を進めようとしたが、神様はそれをお許しになりませんでした。しかし、「その夜」に神様はパウロに一つの幻を与えます。この「その夜」や「ある夜」というのはパウロの生涯でたった3回しか出てこない、きわめて重要な出来事なのです。そして「その夜」に、神様は幻を通してパウロにマケドニアに行くよう導かれます。

10節に「パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。【新改訳2017】」とあります。ここに出てくる「確信した」はギリシャ語で「スンビバゾー」です。「スンビバゾー」の意味は、「証明する、ともに結び合う、解する」といった意味で、ここでは「話し合いをして最終的な結論を出す」といった使い方がされています。ということは、パウロはこの幻を見た後、弟子たちにそれを分かち合い、十分話し合ったうえで、みんなの合意を得て、これが神様の召しであると「確信した・スンビバゾー」のです。このことを見ると、なおさら意見の合う弟子たちとともに旅することがどれほど重要なかがわかります。そしてマケドニアに行くことが神様の召しであると「確信した」パウロ一行はそこでリディアと出会い、このリディアとその家族がバプテスマを受けて救われるのです。

この後、使徒の働き16:16~34で、占いの霊につかれた女奴隷と看守の話が出てきます。この占いの霊につかれた女奴隷はパウロ一行についていき「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えています。」と何日も叫び続けました。それに困り果てたパウロは、イエス・キリストの名によって悪霊を追い出しました。しかしこの女奴隷には主人たちがいたと書かれています。複数の主人たちのために占いをし金儲けをしていた女奴隷でありましたが、パウロが悪霊を追い出したことによって、もうそれができなくなってしまいました。金儲けをする望みがなくなった女奴隷を見た主人たちは、パウロとシラスを捕らえて広場の役人たちのところに引き立てました。群衆たちもパウロとシラスに反対して立ったので、彼らは何度もむちで打たれてからついには牢に入れられてしまいました。しかし、この中でも神様の導きがみごとに働いているのです。真夜中ごろ、パウロとシラスは牢獄の中で神様を賛美する歌を歌っており、ほかの囚人たちはそれに聞き入っていました。するとなんと、大地震が起こったのです。それも、この大きな地震により牢獄の土台は揺れ動き、扉が全部開き、そしてすべての囚人の鎖がはずれてしまいました。目を覚ました看守は、囚人た

ちが逃げてしまったものだと思っしまい、その責任を取って剣で自殺しようとする。使徒の働き 12:19を見るとわかるように、ペテロを逃してしまった番兵たちはヘロデによって処刑されてしまっています。しかし、この剣をとって自殺しようとした看守に、パウロは「自害してはいけません。私たちはみなここにいる。」と叫びました。これを聞いた看守はパウロとシラスの前にひれ伏し、二人を外に連れ出してから「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか」と質問しました。そして二人は「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言い、彼と彼の家にいる者全員に主のことばを語りました。その夜、彼とその家の者全員が、すぐにバプテスマを受けました。夜が明けると、長官たちは警吏たちを遣わして「あの者たちを釈放せよ」と言いました。そして無事にパウロとシラスは牢獄を出ることができました。それも、長官たちが自分たちで出向いてきて、二人をなだめ、二人を牢から出し、町から立ち去るように頼んだのです。このことは、パウロとシラスがローマ市民権を持っていたからです。そして二人がローマ市民権を持っているのにも関わらず、彼らに有罪判決が出ていないのに、公衆の前でむち打ち牢屋に入れてしまったからです。ローマ市民権を持っていない者にはこのようなことが許されたようなのですが、市民権を持っている者をこのように扱えば逆に長官たちに罰が下るのです。このことを恐れた長官たちは、わざわざ出向いて二人をなだめに来たのです。このことにも、神様の不思議な導きを感じます。牢獄から出る時は、パウロとシラスは堂々と出てくることができたのです。パウロとシラスは裁判を受けないままむちで打たれ、牢獄に入れられましたが、後には看守が救われ、さらには堂々と牢獄から出るすることができました。

このように、神様は時に不思議な方法で私たちを導いてくださいます。誰がこのようになることを予想できるでしょうか。時には人との別れであったり、神様ご自身が、私たちが行おうとすることを止めたり。またある時には、神様は私たちがボロボロになって、苦しんで、どん底に落ちることをお許しになります。しかし、私たちは一つのことを覚えておかなければいけません。それは「神様はいつも正しい」ということです。そして神様は必ず私たちを良い結果に導いてくださるということです。どんな苦難の中にあっても、このことを覚えていれば大丈夫です。どんなに過酷な状況にあっても、「神様はいつも正しいから、これも神様の導きだ」と思えば自然と心が軽くなります。御霊に導かれて生きるとき、時には困難な目にあうこともあります。その時、私たちはイエス・キリストという希望をもって、神様を心から信じる信仰をもって生きることが大切なのです。

## 2. 森 千恵美先生 「ネシャーマー」

【新改訳2017】 創世記2：7

神である主は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

ここに出てくる「いのちの息」の「息」はヘブル語で「ネシャーマー」といいます。これは、動物や生きるものに与えられている「ネフェシュ」とは違い、人間だけに与えられているものです。私たち人間は三つの部分から構成されています—からだ、心、そして霊です。初めの人であるアダムにはこの「霊」の部分である「ネシャーマー」が与えられていましたが、罪を犯したことによってそれは取り去られてしまいました。それで人間の子孫はみなこの「ネシャーマー」を持たずに生まれてくるのです。神様はアダムに、善悪の知識の木から食べると「あなたは必ず死ぬ」と言われました(創2：17)。この死は肉体的な死だけでなく、「霊的な死」も表しているのです。アダムは神様の命令を破ったことにより「霊的な死」を経験した、つまり「ネシャーマー」が取り去られてしまったのです。しかし、人間で唯一「ネシャーマー」をもって生まれてきた方がおられます。そうです、イエシュア(イエスのヘブル語名)です。イエシュアは聖霊によって生まれたので、生まれた時から「ネシャーマー」を持っておられました。そういうわけで、イエシュアは生涯の中で一度も罪を犯すことがなかったのです。「ネシャーマー」を持ち、常に聖霊様によって導かれていたので、たとえ誘惑にあってもイエシュアは罪を犯すことがなかったのです。そして常に神様を「父」と呼ぶことができたのです。しかしこのイエシュアでさえも、一時的ではありますが「霊的な死」を味わった、つまり「ネシャーマー」を取り去られたことがあるのです。では、イエシュアが十字架にかけられた様子を見てみましょう。

【新改訳2017】 マタイの福音書27：45～46

45 さて、十二時から午後三時まで闇が全地をおおった。

46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

ここで、イエシュアは神様のことをもはや「父」とは呼べなくなっています。「わが父」ではなく、「わが神」と言っているからです。これはイエシュアのうちにある「ネ

シャーマー」が取り去られてしまったからだといえます。イエシュアは十字架上で肉体的死だけでなく霊的死、つまり「ネシャーマー」が取り去られる、いわば「御父との断絶」も経験したのです。いつも御父とつながっていたイエシュアにとっては、肉体的死よりもつらい出来事であったと考えられます。いつでも御父の声を聴くことができ、御父のみこころをいつでも知ることができたイエシュアにとっては、まさに暗闇の状態でした。しかし、ルカの福音書を見てみるとイエシュアは死ぬ直前に神様のことを再び「父」と呼んでいます。

【新改訳 2017】 ルカの福音書 23：46

イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

つまり、イエシュアは息を引き取る寸前で「霊的な復活」つまり「ネシャーマー」が取り戻されていたのです。十二時から午後三時の間、闇が全地をおおっていた間、「ネシャーマー」が取り去られていたのですが、息を引き取る寸前にこの「ネシャーマー」を取り戻したのです。イエシュアは三日で「肉体的復活」を遂げましたが、それと同様に三時間で「霊的復活」も遂げたのです。

私たちクリスチャンも、イエシュアにならう者として、イエシュアのように死にまでも神様に従順であることが大切なのです。イエシュアのように日々聖霊様に導かれる生活を送っていきましょう。

### 3. ラム・ワイチャン先生 「ボロボロのギター」

私たち人間は「ボロボロのギター」のような存在です。私たちが神様を信じる前、私たちは罪だらけの状態、さびだらけの状態でした。他の人の目から見ると何の役にも立たないような存在でした。まさに、「ボロボロ」で使えない状態でした。しかし、そんな私たちを神様は選んでくださいました。それは私たちが偉いから、イケメンだから、超絶美人だから、IQ が高くてインテリだから、努力家だから、神様を誰よりも愛しているからではありません。もしそのような理由で選ばれたのであったなら、もっと他に優れている人がいるでしょう。他に「選ばれるべき」存在がいるでしょう。しかし、神

様が私たちを選んでくださったのは、私たちを愛してくださるのは、シンプルに「神様の哀れみ」「神様の恵み」なのです。なので、私たちがいい子じゃないと神様の子どもじゃない、とか神様に受け入れられるために努力しなきゃ、という考え方は間違っているのです。神様は、私たちが神様を知る前から選んでくださり、また愛してくださったのです。神様は私たちが「ボロボロのギター」でもそのまま愛してくださるのです。神様は私たちを無理やりに「修理」しようとはしません。たとえ弦が切れていても、ボディに傷が入っていたとしても、音すら出ないとしても、神様はそのまま愛してくださるのです。もちろん、神様は私たちがずっと「ボロボロ」の状態であることを望んではおられません。神様は私たちが「最高のギター」になることを心から望んでおられるのです。そして私たちが「修理」を神様にお願いすると、神様はすぐに「修理」に取り掛かってくださいます。そして私たちをやさしく取り扱ってくださいます。そんな神様に私たちができることは、「賛美する」ことです。「神様って素晴らしい！」「神様ってすごい！」「神様ありがとう！」楽器を上手に弾いたり、歌をうまく歌えなくとも、私たちが神様を心から賛美するとき神様はそれをととても喜ばれます。「ボロボロのギター」でもいいので、毎日神様に心からの賛美を捧げましょう。

#### 4. 神田 満先生 「神の御国」

【新改訳 2017】 ヨハネの黙示録 1章9節

私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり、神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。

ここでヨハネは七つの教会に対して「あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている」と言っています。このメッセージは今日、教会である私たちにも語られているのです。言い換えれば、私たちにも「苦難と御国と忍耐」が与えられているということです。確かに、私たちにとって御国はありがたいものですが、苦難と忍耐はもらってもそんなにうれしくないものです。しかしここで重要なのは、ヨハネが「苦難と御国と忍耐」をセットにして考えているということです。「苦難と忍耐」や「御国と忍耐」ではなく「苦難と御国と忍耐」です。結論から申し上げますと、「苦難の中でも御国という希望があるから忍耐できる」ということです。世の中がどんなに悪くなっ



でも、どんなに苦しい状況にあっても、御国という一つの神様からのゆるぎない約束があるので耐えることができるということです。私たちはつい自分のことばかり祈ってしまいます。神様あれをしてください、神様これをしたいです、神様この問題をどうにかしてくださいとか。私たちは目に見えることばかりを祈ってしまいがちです。もちろん、このように祈ることはとても大事なことです。しかし神様への祈りが全部「お願いごとをする祈り」ならば、神社に参拝に出かける人たちとさほど変わらなくなってしまいます。むしろ、イエシュアは私たちにこうするよう呼びかけています。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 6章31～33節

31 ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。

32 これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

この時代は明日食べるご飯もないような人たち、明日着る洋服がないような人たちがたくさんいました。決して私たちのように何を食べようかと迷っていたり、何を着ようかと迷ったりしていたわけではありません。自分は明日食べる食べ物が見つかるだろうか、飲む水があるだろうか、そのような命にかかわることを心配しているのです。そのような人々にイエシュアは「心配しなくてよいのです。」と言っているのです。そして「まず神の国と神の義を求めなさい。」と言われました。イエシュアは私たちに、神の国が来たら私たちが抱え込んでいるすべての悩みとか苦しみとかはなくなるから神の国を求めて、と言っているのです。神の義とは「神様は約束を守られる正しいお方だ」ということです。つまり、神様は約束を守る正しいお方だから、心配しないで神の御国を求めなさいと言っているのです。

しかし、具体的に「神の御国」とは一体どんなものなのでしょう。例えば子供に「何かいいことがあるから我慢して」と言うとき、その子供はすんなり言うことを聞いてくれるでしょうか。絶対、「なんで」とか「いいことって何」とか「我慢したくない」というふうに返事をするはず。しかし、このことは極めて当たり前のことだと思えます。我慢する理由をはっきりと教えてもらえないのに、我慢を強要される子供たちはとても

つらいと思います。多くの場合、大人たちは「あとになったらわかる」「大人になったらわかる」と言って茶を濁しますが、子供からするとなんだか言い逃れをしているようにしか聞こえません。確かに、「あとになったらわかる」ことなんでしょうが、そのことをはっきりと知らされていない子供たちにとっては我慢することは容易ではありません。最悪の場合、我慢することをあきらめてしまいます。「神の御国」も同じです。イエス様を信じたら天国に行けるという漠然としたイメージはあるものの、その中身がよくわからない方が多くいると思います。まずそもそも「神の御国」ってなに、とか本当にイエス様を信じるだけで「神の御国」に入れるの、とか「神の御国」はいつ来るのとか。「神の御国」について詳しく知っているのと知らないのでは大きく差が出ます。このことをはっきりと理解しないまま困難な目に合うと、私たちはすぐに倒れてしまいます。しかし「神の御国」を正しく理解することで、私たちはあらゆる困難の中にあっても忍耐することができるのです。さて、私たちはどのようにして「神の御国」を理解することができるのでしょうか。それは「聖書を読む・勉強する」ことによって学ぶことができるのです。聖書を読むことによって、私たちの「神の御国」への理解はますます深まるのです。なぜなら聖書の中には神様のやりたいこと、すなわち「神の御国」を建てるという神様のご計画が色々なところに書かれてあるからです。聖書の中には、「神の御国」に関する記述が旧約聖書にも新約聖書にもいたるところにあるのです。そして私たちの「神の御国」への理解が深まれば深まるほど、私たちは神様への希望を見出し、どんな困難の中にあっても忍耐を固く持つことができるのです。